

上記アンケートの集計結果に関する追加調査を行った。

調査時期 62年3月～4月

その集計結果を5月29日に日本消防会館で開催される第2回の研究・技術計画学会シンポジウム（日本の研究開発管理）の基調報告で発表し、さらに本年秋に発行さ

れる本学会誌にも投稿する予定である。

その後、6月24日午後6時に霞山会館で研究管理分科会を開催し、この調査をベースとしてさらに掘り下げ、研究開発の生産性を向上するうえで重要である研究管理のあり方に関する研究を行うことについて相談したい。

（坂倉省吾 通商産業省）

## 人材問題分科会

### 第1回分科会

日時：昭和62年3月30日(月) 16:30～18:30

場所：学士会館307会議室

出席者：14名

本分科会としては初めての会合でもあり、特に齋藤進六長岡技術科学大学長（本学会副会長）にお願いして、「科学技術人材の養成について」御講演いただいた。齋藤先生のお話は、科学と技術の関係（橋渡し）から技術者の能力判定に至るまで、幅広い視野から技術者養成の問題に触れられ、示唆に富むものであった。御講演の後、分科会会員との間に若干の質疑応答が行われた。中でも、先生が紹介された日本生産性本部の調査で、技術者の専門的能力が30歳前後にピークが来ると判定する役員および技術者個人が多いという結果については、これをめぐって活発な意見交換が行われた。

引き続き、本分科会の今後の進め方について討議が行われ、第2回会合は「高度産業社会へ向けての技術者養成の課題と展望」という主テーマの下に、下記の要領により、パネル討論会形式で行うことが決定された。

①日時：昭和62年6月6日(土) 13:00～15:45

②会場：学士会館分館

③基調講演：講師・西澤潤一東北大学教授

④パネル討論：パネリスト4名（産業界2名、学界1名、官界1名）およびコメンテータ1名——これらについては、その選定は役員に一任

⑤司会者：植之原日本電気(株)専務取締役

なお、このパネル討論会については、分科会会員以外の会員にも参加を呼びかけるため、そのPR方を学会事務局に依頼することになった。

（乾 侑 長岡技術科学大学）

## 国際問題分科会

### 第1回分科会

日時：昭和62年3月6日(金) 18:00～20:00

場所：国際協力事業団国際研修所

分科会の活動計画について意見交換を行い、今年度は主としてNICS諸国に焦点を当て、技術移転の社会的問題をテーマにすることを決めた。

### 第2回分科会

日時：昭和62年5月13日(水) 18:30～20:30

場所：テクノバ会議室

テーマ：「技術移転と社会風土」

講師：技術評論家 森谷正規氏

佐々木前シャープ副社長、馬場三菱電機顧問諸氏の出席を頂き、活発な討論が行われた。まず、森谷氏は、技術移転の風土を、国民性などの恒常的要因、蓄積的要因、時代的要因の三つに分け、韓国・中国・日本の技術を取り巻く社会的風土を鋭くかつ適切に指摘した。例えば、韓国は中国寄り、その中国は文官の国で労働蔑視が強く、日本は侍型勤労美德の国民性ファクターがある。また、恒常的ファクターを企業の運営形態から見ると、

韓国は公私の区別が余りない系閥家族主義が強く、中国も血縁を重視する点では同じであり、わが国はそれに反して集団レベルに価値を置き「のれん」を重視する傾向にある。さらに蓄積ファクターでは、韓国・中国では平炉が大型製鉄技術を遅らしたように、このファクターがマイナスに効く場合がある。また、国民所得水準が内需を遅らせており、わが国と際だった対照を示している。

以上のように森谷氏の主張は氏特有のユニークな主張が盛り込まれ、なかなか興味深いものがあった。これに対し、出席者から活発な質問・意見が出された。特に移転にともなう「ブーメラン効果」の見方について意見がわかれた。森谷氏はブーメラン恐るるに足らずと述べ、佐々木氏は技術移転と産業構造の問題を含めブーメランを考えるべきという意見を述べた。

いずれにしても、本会合は成功裡に終わり、今後も2カ月に1回のペースで会合を続けていくことを確認した。分科会未入会者の加入、分科会以外の会員諸氏の参加も大いに歓迎したい。連絡は、分科会主査大島榮次会員（東京工大資源研究所）または学会事務局まで。

（薬師寺泰蔵 埼玉大学）